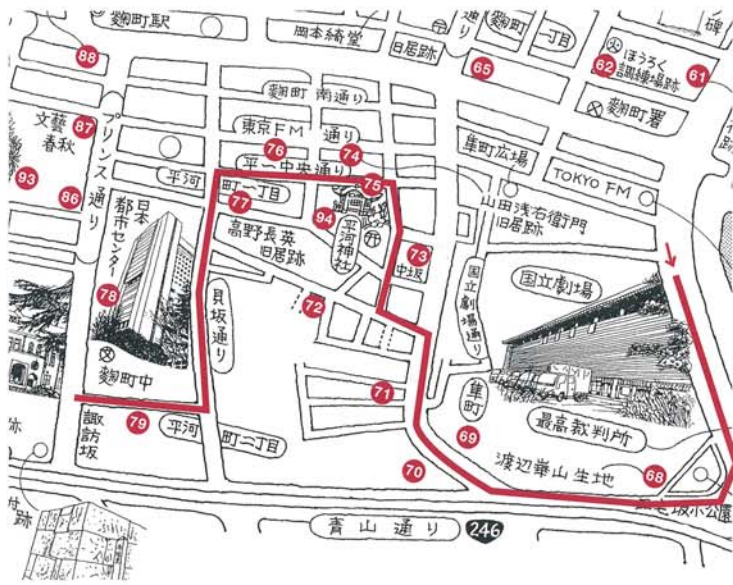


D 散歩道・Dコース
 <隼町・平河町を歩く>



散 歩のスタート→は、校倉造りを模した国立劇場からスタートしましょう。ここは、終戦直後は進駐軍のカマボコ兵舎が建てられていたあたりですが、今はそういう光景を記憶している人も少なくなりました。江戸時代初期は、2代将軍秀忠が日枝神社をここに移転しています。この国立劇場を左に行けば半蔵門。右に行けば最高裁判所の建物が聳えています。最高裁の場所は、江戸時代三河の田原藩三宅家の上屋敷でした。この家老であった渡辺華山(68)は、この地で生れ、蛮社の獄につながるまでここで過ごしたのです。



渡辺華山



堀辰雄

地でした。さらに同じく10番地は、夏目漱石門下で物理学者で随筆家の寺田寅彦(72)の生誕地ですが、いずれも今では思い出のよすがになるものではありません。また、長唄の唄方で人間国宝となった14世杵屋六左衛門も、同3番地に住んでいました。

そ らに右に折れて、国立劇場通りを曲った角あたりが、日本の象徴派の詩人であった蒲原有明(69)が生れた場所でした。通りを隔てた平河町二丁目16番地あたりに、今も活躍の日本画家の堀文子(70)の生家があった場所。戦前、泉鏡花や邦枝完二の本の装幀や新歌舞伎の美術なども手がけた日本画家の小村雪岱の旧居住地は12番地。同じく13番地は、『風立ちぬ』などの清冽な小説で今なお人気の高い小説家堀辰雄(71)の生誕

| | |
|------------|---|
| ウォーキング・データ | 距離：1.6km 2000歩(歩幅80cm) 所要時間：30分(ゆっくり歩いて) |
|------------|---|

※かわいい人物紹介は、WEBサイト「麹町界隈わがまち人物館」で!

こ の通り付近には若い時期の小説家国木田独歩が、家族を呼び寄せた借家や下宿をしていた場所がいくつかありました。このあたりは、かつて三軒屋と呼ばれていた地域でした。場所は特定できませんが、この付近に幸田露伴の娘でやはり小説家になった幸田文が、結婚した当時、所帯を持ったと彼女自身が後に語っています。幕末から明治にかけて、医師として活躍した松本良順(後に順)(73)のいた場所もこのあたり。司馬遼太郎の『胡蝶の夢』に、当時の雰囲気がよく描かれています。



松本良順

そ の先は、平河天満宮(75)です。平河天神とも呼ばれ、家康入府以前には江戸城内に鎮座していましたが、入府後はこの地に移されたのです。江戸時代には大変なにぎわいをみせ、参詣客も多くの歌舞伎狂言などの舞台にもなっています。この付近に、赤穂浪士たちの隠れ家もあったといいますが、場所は特定できません。平河天満宮からすぐの平一中央通りあたりには、樋口一葉の小説の師でもあり、また秘かに一葉が暮っていたという小説家の半井桃水(76)の住んでいた場所がありました。一葉は書いた小説を胸に抱きながら、このあたりを訪れたのです。

麹町大通りを出る手前の東京FM通りには、幕府の御様(おためし)御用を務めた山田浅右衛門(74)の代々の屋敷がありました。御様御用とは刀剣の切れ味を鑑定するという役目で、早くいえば罪人の首切り役を任されていたのです。

渡 辺華山がその罪を問われた蛮社の獄で、同じく幕府から追われた蘭学者の高野長英(70)の学舎があった場所も平河町の貝坂通り(一丁目3、4番地あたりか)でした。また平河町一丁目2番地には戦前、時代小説家の邦枝完二(75)の住んだ家がありました。



半井桃水

現在建て替え工事中の麹町中学校は、かつて安田財閥の総帥安田善次郎の屋敷跡でした。その近くにはお伽噺を日本に広めた巖谷小波(78)の生家がありました。また都道府県会館が建っているブロック(平河町二丁目6)には、日本の西洋美術の先達でもあった黒田清輝(79)の屋敷跡でもありました。少年時代の巖谷小波と黒田清輝は、まだ鬱蒼としていたこのあたりを遊び場としていたといえます。戦前首相となった政治家の平沼騏一郎も、同6番地に屋敷がありました。



巖谷小波